ものの必須の書物として我々の書架を飾つてゐるのである。今ここに在鮮二十年以上にわたつて朝鮮古代文化の究明にその全力を擧げてをられた藤田元京城大學教授の業蹟のまとめられたことは、朝鮮考古學が日本學者の東亜考古學に於いてもつとも貢献したものゝ一つであり、現在その整理と展望が要求されてゐる際、同教授のすぐれた論文が城大關係の書册に多くのせられて、內地一般の人々の手にすることが少なかつたものの多い丈、たいへん有難く思ふところである。

＊　＊　＊

さて本書に收められた論文は左の九篇である。

朝鮮の古代文化
朝鮮の石器時代
櫛目文様土器の分布に就きて
大邱大鳳町支石墓調査
朝鮮發見の明刀錢と其遺蹟
樂浪封泥攷
樂浪封泥續攷
朝鮮及び日本發見の耳飾に就いて
通溝附近の古墳と高句麗の墓制

以上をみてもわかる通り石器時代から金石併用期、漢樂浪郡時代、三國鼎立時代と廣い分野にわたつてゐて、(一)はその綜說とも見るべきものである。その中で「(イ)朝鮮半島固有の文化の特質、(ロ)大陸文化が之を如何なる形によつて我國に傳へたか、(ハ)漢族の文化と北方系文化が、半島にあつて如何なる關係にあり、日本に如何な

朝鮮考古學研究

藤田亮策著

昭和二十三年八月　京都高桐書院刊

A5版　五四〇頁、圖版二〇葉　定價七〇〇圓

この十年程の間、考古學の分野に於いても、諸學者の長い研究生活の成果を論文集としてまとめられる風がとみに盛んになつて關野、濱田、原田、梅原博士等の論文集は考古學のみならず東洋學を學ぶ

る性質となつて傳へられたかを知るのが最も重要のことであり、朝鮮考古學の我國に於ける使命は專ら茲にあると思ふ」とのべてをられるが、以下の論文はこの為の眞摯な證明ともみられるのである。

「朝鮮の石器時代」は「東洋史講座」のためにかかれた概說である。朝鮮考古學は日本とちがつて古蹟調査事業の下で發達した丈、自然燦然たる遺物を伴ふ古墳などに重點がおかれ易い。日本では考古學といへば貝塚あさりや土器拾ひを聯想する位で、各地にこの興味をもつた人が少くなくたえず新しい資料が發掘報告される、土器學の方面は独特な進歩をしたのである。この日本に於いて解決のつかぬ繩紋式土器や彌生式土器の起源系統の問題はあたりをみまはして先づ朝鮮に視界がむけられる。所が朝鮮全土にわたつて發掘が非常に少く、この關係を明らかにするにきわめて困難である。しかし乍らかうした事情にあり乍ら從來の調査を整理し、土器を㈠厚手無文土器、㈡櫛目文土器、㈢丹塗磨研土器、㈣押型及打型文土器にわかつて說明を加えてをられる。横山將三郎氏の「朝鮮の史前土器研究」(人類學先史學講座所收)と共に現在よるべき朝鮮の土器についての少い文獻の一つである。これをよむにつけ雄基貝塚等發掘報告がなされてゐたらとの望蜀の感のおこるを禁じ得ない。しかし乍ら將來金石併用期をふくめて朝鮮石器時代研究の恰好の入門書となるべきは云ふをもちひないと思はれる。「櫛目文様土器の分布に就きて」は昭和五年の作品である。朝鮮に於けるその分布を說きシベリヤから北歐にかけて北方ユーラシヤに廣く分布する Kamm Keramik との關連を求められたこの見解、その後長山列島や中國北邊の發掘でたしかめられており、澄田正一氏の如きも現にその研究をすすめつつある一人である。これと日本の土器との關係については前節「朝鮮の石器時代」(八一頁)中に筑前遠賀川河床遺蹟その他山口縣の海岸地方にみとめられてをられる。これはおそらく筑前立屋敷等にみる彌生式もこの種土器の影響を土器のあるものを指したものと思はれるがその形式や製作伴出石器等からみて無理があり、むしろ求むれば九州繩紋式土器中の曾畑式土器の如きものにあてるべきであらう。

「大邱大鳳町支石墓調査」は南鮮金石併用期の古墓の發掘である。我が筑前須玖の大石がこれの系統をひくものと考へられたが、最近筑前糸島郡怡土村において有光教一、森貞二郎氏によつて支石墓とみるべきものが發掘せられたことをこの機會に紹介しておかう。

「朝鮮發見の明刀錢と其遺蹟」は藤田教授のその學風を遺憾なく發揮した代表作の一と思はれる。遺物の精細な觀察と遺蹟分布の丹念な探索によつて明刀錢が陸路朝鮮に傳播した經路を想定し、伴出の銅器・鐵器・土器の系統觀に深い省察を致された。梅原博士、小泉顯夫氏との共著「南朝鮮に於ける漢代の遺蹟」にはややその資料を紹介され、又「朝鮮古文化綜鑑」第一卷樂浪前期にその一括資料がみえる。併せて參照すべきものである。

「樂浪封泥攷」「樂浪封泥續攷」は樂浪土城及び樂浪郡內の封泥を集成し考察を加へられたものである。幾分の僞作はあるが、大部分は確實なもので、樂浪郡下二十五縣の大部分の地名があげられるとし、又封泥の出土によつて土城の朝鮮縣治、樂浪郡治址たるべきこを推定されてゐる。この考察はすべて遺物の嚴密な觀察のもとにたてられてゐる。中國では早く「封泥攷略」「齊魯封泥集存」等の著錄があるが、金石學的興味が勝つて未だに考古學的用意に欠けた所

が少くない。この論攷はかうした從來の金石學の素材を考古學の基盤の上に解釋されたものであつて、中國に於けるこの種研究にも一つの道を開拓してゐる。

「朝鮮及日本發見の耳飾に就いて」は日本及び朝鮮古墳發見の垂下飾付耳飾の確實な例を拾つて、其の製作技工を比較考究された資料集である。耳飾は身體裝飾ではあるが同時に金屬工藝品である。このため鍍金・貼金――打伸し、鑿の仕上げ、兵庫ぐさりの手法、板金の打拔き、フイグラン、簸玉等各種の手法を用ひており、出土の資料をかうした工藝的觀點から整理された精細なデータが附せられてゐる。

「通溝附近の古墳と高句麗の墓制」は池内博士の大著「通溝」上卷が出たあと、藤田教授がしらべられた記錄に基づいてその補足をされると共に高句麗の古墳の性質についてのべられたものである。高句麗古墳の方台狀をなすのは必ずしも短塚が原始的形式であるからではなく、漢族の接觸と考へてをられる。又石築大陵については、その陵域をしらべ土壘や陪塚の調査に及び陵の附近に建築址があり瓦磚を使用し、陵の祭祀又は守陵に關する建築のあつたことを推定されてゐる。最後に石塚と土墳についてその分布と成立の關係についてのべ、特殊の施設のある大陵を多くは王陵に比定すべきものとされてゐる。又「折上式・穹窿式・特送式等の石室天井の持つ曲線の美しさも漢族の磚築墓に見るものと同じく、若し陵前の建築址が祭陵の爲めのものであつたならば、高句麗の陵墓に漢墓の影響ありとする予の推定が益々力強くなる」と述べてをられる。高句麗古墳石室内の壁畫中、山東省の畫像石や遼陽漢墓壁畫の如きものの傳統をひくもののあることが考へられるので、藤田教授の指摘された外形、外部施設、内部構造と共に將來改めて高句麗の漢文明の攝收の面を新たに見直す必要があらう。

* * *

本書でとりあつかはれた問題はその時期や問題においてきはめて廣汎である。石器時代土器や明刀錢、封泥の如きものにも細心の注意を加へられ、しかも廣い視野からみとほしを與へてをられるのである。たとへば櫛目文樣土器や明刀錢を論じてはその背後の廣い文化の流動を考へ、封泥を取扱つては、漢代統治の實情を探り、個々の支石墓や古墳の調査から古墳群の性質に及んで生彩ある展開が導かれる。これらの諸研究によつて「朝鮮の古代文化」に於いてのべられた三つの問題にも多くの光明を與へられたことは否むことが出來ぬ。

しかしこれらの立論にあたつては、資料のとりあつかひに用意周到をきはめ、明刀錢、封泥、耳飾の如きは資料集としての意を寓せられてゐるのみならず、明刀錢封泥に關する記述の如きは金石學的な立場をこえて一つの新生面を開拓してをられると思ふ。

本書は序文にみえるやうに村田治郎博士、杉山信三氏が編纂に梅原博士が圖版選定にあたられて後藤田教授の序文をもとめられたといふ恰好の美しい作品である。朝鮮で行はれた日本學者の生々しい學問的研究業蹟であると共に朝鮮考古學の種々の問題をはらんだその良き入門の書として用ひらるべきことは私共の信じて疑はぬところである。梅原博士との共著「朝鮮古文化綜鑑」も刊行されつつあるが、年來の結實たる業蹟に感謝の意を表すると共に、更に内地に於ける著者の活躍を祈りたいと思ふ。（岡崎敬）